

「空飛ぶバラ」の謎にせまる

—バラに見る国際経済—

岐阜大学教授 福井博一

「空飛ぶバラ」とは？

バラは、切り花の中でもとくに消費量が多く、世界中で需要がある国際商品となっている。近年、その国際商品であるバラがドバイを経由し、航空機で日本に輸入されている。これはまさに「空飛ぶバラ」といえる。

航空機で花が輸入されること自体は目新しいことではない。これまでも、オランダやインドからバラは輸入されていた。しかし、ドバイ経由で日本へということが日本のバラの輸入産業を大きく変えることになった。

「ドバイが発展すると日本のバラの種類が増える」という謎かけのようなフレーズが宣伝されていたが、これもドバイ経由がキーポイントになっている。

これまでは、日本に花がない時期に花が咲いている地域から輸入するという隙間をうめるためのビジネスだったのが、ドバイ経由の輸入によって、大きく変化した。

ドバイ経由でバラの生産や輸入はどのように変化したか

以前はオランダからのバラの輸入が多かったが、実はオランダはあまり花の生産には適していない。10月から2月までは日照時間が短く、夜中じゅうナトリウムランプを照射して生産しなければならない。ただし、夏の環境がよいため品種改良や育種には適している。そのため品種改良された種や球根をオランダの生産者がつくり、日本にも輸出されていた。また、オランダはヨーロッパの花の中継地点で大きな市場があるため、他国のバラの生産会社は、オランダを経由してバラを輸出していた。オランダから大量に輸入されていたバラは、実はアフリカ産のバラもあった。現在では、アフリカのケニアやエチオピア、南米のコロ

ンビア、エクアドル、ほかにインドやマレーシアなど、赤道直下の地域ではさかんにバラが生産されている。

バラ栽培の環境条件として、最低気温が10度、最高気温は25度前後という気温と、さらに日射量が強いという二つの条件が絶対に必要である。世界中のバラの育種会社が調査したところ、赤道直下の2000m以上の高地が、バラの栽培にもっとも適していることがわかった。バラの栽培において土は肥料を吸収するための媒体なので、どのような土でも栽培できる。ケニアでは養液栽培といって、火山礫に液体肥料をやって栽培しているところもある。土に影響されない栽培技術は、30年程前から確立されている。

私はキリマンジャロの中腹のケニアのバラの生産現場（写真①・②）を実際に見てきた。バラ栽培の農地は日本に比べて広大で、東京ディズニーランドとディズニーシーを合わせた面積の10倍の広さがある。労働者の多くは女性で、とても安い人件費で働いている。1日だいたい1～2ドル（約200円程度）と、オランダの1時間2500円とはくらべものにならないくらいの賃金だ。1日200円で生活できるのかと思うかもしれないが、ケニアの人々は1年中良好な気候のため、1年を通して農耕ができ食べ物が入るので、現金収入にたよる必要がない。冷蔵庫や洗濯機など、食生活以外の贅沢をするために働くという考えが主流なので、これほど安い賃金でも大丈夫なのだ。そのため、安価にバラを栽培することができる。

安くて大量のバラを生産するアフリカはおもにヨーロッパに向けて輸出をしていたが、近年、アジアにも目を向けるようになった。しかし日本への直行便がないため、日本へ輸出する際の中継地点が必要だった。世界のハブ空港をめざすドバイが手を挙げた。日本がドバイ経由でバラを輸入できるようになると、オランダからのバラの輸入量

は減っていった。

中継基地ドバイ経由の空輸のメリットは？

ドバイでは、1966年に最初の油田が見つかるのと、1971年の独立以後、オイルマネーを利用してインフラ整備を進めた。しかし周辺国にくらべて埋蔵量が少ないため、ドバイが将来的に経済発展を維持するには、石油以外に資本投下をして利益を得なければならなかった。そこで国際規模の中継基地・流通基地として発展していくために様々な政策が推し進められた。たとえばバラが多く流通すると、植物検疫や物流などの業務が発生し、雇用の機会が増える。雇用が生まれた結果、人が集まるようになると、さまざまな産業がドバイの中で成立していく。そのためドバイは、外国企業の進出を促進するよう、関税や法人税などの各種税金が免除されている経済特区をつくった。税金で収入を得るよりも、成立した産業でより大きな収入を国として得るという発想だ。

ドバイのエミレーツ航空（写真③）が、1995年から関西空港に直行便を運行している。アフリカのバラの輸出はドバイを経由することで、オランダを経由するよりも半分くらいの時間に短縮された。バラの輸出においては、時間の短縮だけではなく、質の問題も大切だ。オランダ経由のときは、運んでいるうちにバラを運搬するコンテナ内の温度が上がってしまい、日本に着く頃には室温に近く、バラにとってはかなりの高温の状態になっていた。しかし、ドバイのフラワーセンターには航空機に搭載するコンテナをそのまま冷蔵保管できる大型の急速冷蔵庫が設置されている（写真④）。アフリカからの荷物を積み替える際にも、そこでは5度以下に温度を下げるができるため、日本まで低温のまま運搬することができるようになった（写真⑤、関西国際空港での検疫のようす）。このフラワーセンターは巨大かつ最新設備を備えており、おそらく世界最高の設備だと思う。ドバイを中継することで、安価で安定した品質のバラを日本にも輸出することができるのだ。

バラ輸入の問題点と課題

国内のバラの生産者への影響が懸念される。今までは、国産と輸入のバラでは、それぞれ物流のルートが違っていた。しかし、最近は大量に輸入されて余ったバラが国産の市場に流れるようになり、国産のバラと輸入のバラがまともに競合する状況になってきた。競合した場合は、国産はどうしても価格面では分が悪く、その差は1本約30円。また、輸入品の価格は国際価格として設定されているため、安いだけでなく安定もしているという安心感もある。

アフリカのバラ園は日本に比べて大規模な生産体制なので、数千本単位という急ぎの注文にも対応できるというメリットがある。それに比べ日本国内だと生産している農場が小さいため、同じ品種を数多くそろえることが難しいというデメリットがある。

今後の課題は、日本が国際物流商品であるバラに、どのようにかわかっていくかということだ。国際商品であるため、バラは日本だけでなく需要があるところへ一気に移動していく。世界の消費動向を把握しておかなくては、現在のようにバラの安定した輸入ができなくなる可能性がある。また、品種改良の技術を高め、日本にしかできない高品質のバラを世界に発信していくことも考えていかなければならないだろう。

中学生へのメッセージ

すべてのものが国際社会の中で動いている時代である。そのことを自覚して、社会に適応してほしい。国内だけの観点ではなく、国際的な観点でものをとらえることが大切だと思う。

たとえばバラの品種改良を考えると、国際社会の中での日本を意識し、日本人の和のセンスをいかしたバラを作り出すという発想が必要だ。

国際的な観点を持って、日本の産業の良さを見直し、その良さをもう一度国際的に発展させるという感覚をつねに持ち続けて、これからの日本の産業を担ってほしいと思う。